

〔合評会報告〕

伊東恵深 『親鸞と清沢満之』 を読む ― 著者を交えての合評会 ―

書評 1 本明義樹

書評 2 西本祐攝

書評 3 碧海寿広

リプライ(著者) 伊東恵深

コーディネーター 名和達宣

開催にあたって

名和 達宣（真宗大谷派教学研究所）

二〇一八年一月に春秋社より刊行された伊東恵深著『親鸞と清沢満之——真宗教学における覚醒の考究』は、新世代の真宗教学者による先駆的な研究書であるとともに、これまで多くの研究者によって考究されてきた「親鸞と清沢満之」というテーマが、初めて一冊の書としてまとめられたものである。全体は「第一部 親鸞論」「第二部 清沢満之論」より構成されており、それぞれ以下のような章が設けられている。

序 問題の所在

第一部 親鸞論 群萌における覚醒の様相と内実

第一章 横超の仏道

第二章 信心獲得の内実——「現生十益」の文を中心として

第三章 「行者のはからい」考

第四章 真仮の分判——「化身土巻」の思想的意義

第五章 親鸞晩年の思想課題——「消息」を手がかりとして

第六章 悪の自覚道——真宗の人間観・救済観

第二部 清沢満之論 「他力門哲学」における覚醒の様相と内実

第一章 「他力門哲学骸骨試稿」の思想的位

〔合評会報告〕伊東恵深『親鸞と清沢満之』を読む

第二章 清沢の「宗教」観

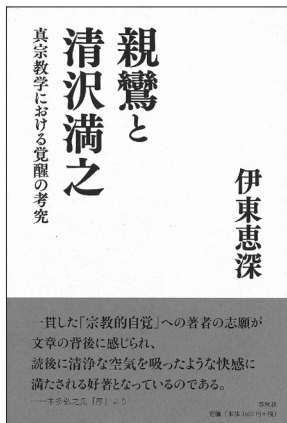
第三章 有限と無限

第四章 心霊の開発

第五章 他力門における覚醒の構造

結 一切群萌の救済

去る二〇一八年十月八日、本書の研究史的・現代的意義を確かめるとともに、一冊の書を起点としてこれからの教学研究（あるいは清沢研究）の方向性と可能性を討議することを目的に「伊東恵深『親鸞と清沢満之』を読む——著者を交えての合評会」を、同朋大学仏教文化研究所の主催、また日本近代仏教史研究会吉田久一基金研究プロジェクト「仏教思想を中心とした日本近代思想史の再考」（代表 山本伸裕）の共催により開催した。開催にあたっては、著者の伊東氏がかつて在籍していた学事・研究機関である、大谷大学の真宗総合研究所、親鸞仏教センターに後援として携わっていただき、特に大谷大学には合評会の会場（慶問館）を提供いただいた。さて、「親鸞と清沢満之」というテーマをめぐっては、真宗教学、就中、大谷大学の真宗学においては、「真宗学



の学びの真価を決めるのは、その人が満之を通過しているかどうかにかかっている。」(松原祐善氏の言葉、安富信哉『清沢満之と個の思想』「あとかぎ」より)という言葉に象徴されるような、清沢を通して親鸞の教を学ばんとする方法が浸透している。また、近代仏教史研究のフィールドにおいても、長年、清沢を「親鸞の近代的再生」、すなわち「清沢の回心」近代における親鸞の回心」として評価する視座が重視されてきた。しかし他方では、そのような研究姿勢自体を批判する論も数多く発表されており、近年はことに、清沢の思想を親鸞とは切り離れた固有のテキストとして読み取ろうとする研究が、少なからず世に出されている。

親鸞と清沢という、異なる時代を生きた二人を切り結ぶ視点について、本書の序では「親鸞が開顕し、清沢満之が顕彰した浄土真宗の仏道」(一〇頁)と端的に言い表され、本論「第一部 親鸞論」においても、清沢やその代表的な門下・曾我量深の視点を通して親鸞思想の読解がなされている。このたびの合評会では、各論ならびに「親鸞と清沢満之」という全体テーマをめぐる議論することを企図し、これまで『教行信証』「坂東本」の翻刻に携わりつつ親鸞思想の真相を追究されてきた本明義樹氏(真宗大谷派聖教編纂室)に「第一部 親鸞論」の書評を、清沢を通して真宗教学の内実を探究されてきた西本祐攝氏(大谷大学)に「第二部 清沢満之論」の書評を、そして現代の「近代仏教」研究の第一線で活躍されている碧海寿広氏(龍谷大学アジア仏教文化研究センター)に総合的な書評を依頼した。

以下、各書評者の要旨と著者の伊東氏によるリプライを報告する。

【書評1】

「第一部 親鸞論」について

本 明 義 樹（真宗大谷派聖教編纂室）

はじめに

本書の目的について「何か殊更に目新しい知見を披歴しようとするものでなく、「親鸞が明らかにした（本願他力）の思想を、あらためて尋ね直す営為」（「序 問題の所在」一〇頁）だと述べられている。本論考は著者が主体的な問いをもって、宗祖の教えを曾我量深らの思想を通して、丁寧に確かめ直されたものである。ここでは本書の公開の意義と、本論考における親鸞思想究明の学的姿勢について気づいた点を述べたい。

現代において本論考の公開が意味するもの

社会構造の変化により、地域社会が崩壊し、伝統文化が失われていく中で、宗教に対する意識も変化し、寺離れが加速している。既存の仏教宗派や寺院の存在意義が社会全体から問われ、新たな意味付けや再構築が求められている。そうしたプレッシャーの中で、宗派も寺院も、社会に一定の有益性や公益性を示すことが必要不可欠なこととして強く認識されている。

対社会という対立軸を意識した中でなされる教化や教学は、社会そのものの価値観が変化するなかで、常に対応を迫られ、結果として社会に

受け入れられることが目的化したり、教化のための方法論だけが課題となるなど、仏教本来の姿を見失い、変質化させてしまう危険が伴う。しかも、そうした対立軸の中で仏教が声高に語られるほど、個の普遍的な救済というものが不問にされてしまう傾向がありはしないだろうか。

はたして、個の救済なしに、仏教が弘く人々に伝わるなどということがあり得るのだろうか。本書で「常行大悲の益」が考察される中で、仏の大悲が衆生に伝わるのは「大悲の願心が衆生を救い、その救済の事実が衆生を通して他者に伝わっていく」ものであり、「阿弥陀如来に攝取された凡愚は、その愚かな身が大悲を受け伝える場として転ぜられていく」(第二章)三八頁) 様相が確かめられている。教えに出会い、救われた一人ひとりが、自ずから社会の闇を照らす光とならしめられるのである。それはたとえ小さな灯であろうとも、千歳の闇室を照らすが如くである。ならば今必要とされる思想的確かめとは、「苦悩の現実を生きる現代人、一人ひとり」の「目覚め(変革)」、つまり個の覚醒の内実を究明することであろう。本書はあえてそのことに正面から向き合い、丁寧に掘り下げられているのであり、そこに現代に公開される大きな意義があると信ずる。

『教行信証』の手法』について——実証的文献学と聞思の学

本多弘之氏による「序」には、本書の学的姿勢について「親鸞聖人の

『教行信証』の手法に由来することを、この著書を通してよく了解することができた」(「序」ii)と述べられている。

はたして『教行信証』の手法』とは何を意味するのだろうか。『教行信証』特に、現存する唯一の真筆である『坂東本・教行信証』(以下「坂東本」)を通して、親鸞の学的姿勢を伺う時、文献学的な厳密性と、聞思の学としての純粋性を共に兼ね備え、両者を妥協することなく徹底されていることが知れる。

親鸞の文献学的な厳密性を挙げるならば、本願文について異訳經典と照合され、字訓釈や註記では『廣韻』や『玉篇』、『類聚名義抄』等を参照し至る所に書き込みがなされている。また旧訳と新訳の相違にも注目され、曇鸞や道綽の事績についての歴史考証も行われているほどである。

また聞思の学としての歩みは、「坂東本」に見られる最晩年までの思索の跡から伺うことができる。そこには書改めや訂記のあとが数え切れないほどあり、繰り返し推敲が重ねられていたことが知られる。本願の教えを聞思する歩みの中で、自身がこれまで学び得た教学や、漢文の訓読、仏教の術語、さらには聖教の一文字一文字に至るまで、決して自明視せず問い直し続けられたのである。この不断の学びの姿勢こそが聞思の学の純粋性を表すものである。『教行信証』の手法』とは、まさに文献学的厳密性と聞思の学としての純粋性についてどこまでも妥協することのない学びをいうのでなくてはならない。今、その二つの視点から本書の学的姿勢を見た時に感じた課題について述べたい。

「坂東本」への注目——実証的文獻学の厳密性

本書では「坂東本」についての行改めの箇所や「化身土巻」の分冊、題号の加筆訂正などにも注意がなされている。「坂東本」の高精度のカラー影印本や翻刻本が刊行された今、本書のように思想研究の分野においても「坂東本」の書誌学的考察を視野に入れることは必要不可欠のことと思われる。

たとえば、本書では『教行信証』『信巻』に引用される『華嚴経』の読み下し部分に注目し、「如来等同思想」が「親鸞の晩年に限って考察すべき思想ではない」（第五章 一〇六頁）ことが論証されている。しかし、この箇所を「坂東本」で確認すると、その筆跡は「建長年間も初期の筆致」でしかも「三寸一分五厘の切紙」に書き改められており、「書き直される以前の本文は何文字であったかは不明」（赤松俊秀「教行信証の成立と改訂について」）とされる箇所である。このように書き改められた紙面の状況、後期の筆跡などを考慮するならば、親鸞が晩年に至り、特に該当箇所を課題として手を加えられたとも考えられるのである。また、筆跡鑑定や書き改めの紙面の状況からは判断が困難な訓点についての研究は、ほとんど手付かずの状態である。本書で当該箇所の読み下しに注目してなされた論証は、今後さらに「坂東本」における書誌学的な視点を加味し、新たな思想的展開がなされることを期待したい。

〔合評会報告〕伊東恵深「親鸞と清沢満之」を読む

近代教学における「曾我量深」の位置

——聞思の学としての純粹性

本多氏は本書の性格を「近代教学」、すなわち清沢満之・曾我量深と受け継がれた「宗教的覚醒」を足場にして学問的態度を構築しようとしている」（「序」ii）との確に述べている。そのことは著者自身が「真宗学的知見からの先行研究はこれまでに多数あるが、そのことを自明の理とすることなく、また知的理解に陥ることなく、自らの問題として、あらためて曾我の言葉に確かめていきたい」（第六章 一〇九頁）と語るその究明姿勢からも知られる。

ここで、「先行研究」を「自明の理」とせず、「自らの問題」として論じる姿勢は、本論を一貫する主体的な学び、つまり聞思の学を象徴している。しかし、はたして「曾我の言葉」だけは例外的に「自明の理」としてよいのか、さらには「曾我の言葉」は「先行研究」ではないのかという素朴な疑問が生じる。この問いは、「近代教学」を「足場」にしていく私自身に向けられた問いでもあった。「近代教学」から受けた影響が絶大であればあるほど、それは思想形成の強固な足場となり、その足場自体を問うことが困難になってしまう。清沢や曾我が、高倉学寮の学問を批判的に超えようとした当時、それらの学説は真宗学を学ぶものにとって自明のこととなり、問うことすらなされない状態であったはずである。しかし、彼らは、自身の足場となり、学びの前提となる土台を「自

明の理」とせずに問い直し続け、経言、さらには宗祖の言葉に向き合われた方々ではなかったか。聞思の学とは、「自明の理」としてある私たちの前提そのものを不断に問い直すなかで深まる学びである。「親鸞の言葉」や「曾我の言葉」を聞思の歩みのゴールや答えにして、自己自身を問い続ける歩みを止めてしまうことがあってはならない。「曾我の言葉」を通して考察するのであれば、なぜ曾我でなくてはならないのかを検証（著者においては十分なされているであろうが、そのことが読者と共有されることが不可欠）した上で論が展開される必要性を感じる。本書の刊行を機に、第三部としての「曾我量深論」が展開され、その上で親鸞思想の究明が深まることを切に願う。

「第Ⅱ部 清沢満之論」について——真宗学の視座から

西本 祐 攝（大谷大学）

総評

本書の第Ⅱ部は、「清沢満之論」「他力門哲学」における覚醒の様相と内実」と題され、清沢満之の「他力門哲学骸骨試稿」（以下、「試稿」）における他力思想了解の究明を目的としている。著者は真宗学を専攻し博士論文に親鸞の仏土観をテーマとされたが、この著書自身の学的課題（親鸞の仏土観）において満之の「試稿」を選び取り、やがて「真宗教学における覚醒」という課題にまで深められた研究である。

「試稿」を究明する際に著者は、満之の「応用心理学」「宗教哲学骸骨」（以下、「骸骨」）、“SKELETON”『宗教哲学骸骨講義』『宗教哲学初稿』『在

床懺悔録』（以下、「在床」）等の「試稿」以前の論稿、及び『精神界』所収の論稿等と照応させつつ論じる手法をとる。“SKELETON”を踏まえて『骸骨』の語義を説明する点などからは多くの示唆を与えられる。また、満之の思索をその思想的背景である親鸞の諸著作や『大経』、七祖聖教等を通して説明し、「試稿」が真宗思想を受け継ぎ、論じられていることを明らかにする。これはかつて安富信哉が『清沢満之全集』刊行の必然性を確認する中で、満之研究を「思想的背景を踏まえた十分な検討がなされていない」と歎いた精神にも呼応する研究であり、総じて奇をてらわれない内容となつていとも言えよう。

従来、「試稿」は満之の生涯を詳述する研究でも概説的、断片的にし

か触れられず、その書名さえ挙げない研究書もある。思想研究においてもその全体について考察された研究は多いとは言えない。代表的な研究として古くは西山邦彦「清沢満之における哲學的基礎」(『清沢満之の研究』教学研究所1956)、近年では今村仁司『清沢満之と哲学』(岩波書店2004)があり、後者は満之の思想的土台をなす思索録という見解を提示している。「在床」「試稿」等の石水期の思索は、江戸期の真宗了解を踏襲したものと評されてきたこともあり、真宗学における研究も限定的である。満之の思想は親鸞思想と異なるとする評価が在世当時から現代に至るまで存在するが、この論点についても、満之の親鸞思想了解を解明する本書は重要な意義をもつと言えよう。

各章の内容

第一章では、真宗教学における満之の意義が、江戸期の封建的な社会体制の中で矮小化し習俗化していた親鸞思想を「有限・無限」という西洋哲学の用語で捉え直し論理的に再構築することで、一切の存在に開かれた普遍的真理として顕揚したことにあるという。また、「試稿」には浄土真宗の仏道との値遇にいかなる宗教的覚醒と信仰の歷程があるのかが推究されており、ここに「試稿」を考究する大切な意義があるという。著者は満之における信仰の転機を「養痾」にみる視点を採用する。

第二章では、満之の宗教観を究明する。『骸骨』における「道理と信仰」

についての了解が「試稿」にも継承されることを確認しつつ、「試稿」の宗教観は「死生の問題について安心立命」、すなわち「心の平安」「精神的苦悩からの解放」に主眼があるという。「試稿」には『骸骨』の学的関心とは異なり、死に直面する療養生活で浄土真宗の真髓を了解し、如来の智慧の光明を感得する求道者としての満之があるという。

第三章では、満之の有限無限論を究明する。有限無限は同格ではなく異格の関係であり、無限はそれ自体で全体を構成し有限はその一部分に過ぎず、無限が上位の関係にあるという満之の論を確認する。『骸骨』の有限無限観をめぐって、今村が指摘する「無制限の有限(教的無限)」と「質的無限(宗教的無限)」の混同について、満之があえて無限を数的に論じるのは、有限と無限は本来的に合致することを論理的に証明するためであり、それは有限が無限に至る道を論理的に切り拓く試みであったという。無限に関する実際談は、覚者においてのみ、という満之の見解が「真仏土巻」所引『涅槃経』の随自意説によることを明らかにする。また、自身の死生の問題という煩悶憂苦に直面し他力門に帰依するに至った点に『骸骨』と「試稿」の明確な差異があるという。

第四章では、『骸骨』の靈魂論(有形説、無形説、自覚説)を踏まえ、その自覚説が「試稿」で自覚の一致を論じる基盤となっているという。また、満之が「試稿」では、無形説に属する「解剖生理学上の神経系統の構造と作用」を精神作用の考究に不可欠であるという了解(『哲学館講義録』)を採用する。また、「the Soul」(“SKELETON”)と「パーソンナ

リチー」「在床」「心霊」ルビ）が異なる概念を示すことを指摘し、「試稿」の「心霊」は「mind（意識・知性・感情）」の意味に近いと推論する。この論が元良勇次郎『心理学』（明治三三年刊）の援用であり、有限心霊（知情意）が無限心霊へ到達する筋道を満之が論究する点に注目し、有限無限の動的関係を西洋の神の概念で十分に究明することは不可能であり、仏教に求める必要があると満之が了解していた、と指摘する。

第五章では、『大乘起信論』『論註』『唯信鈔文意』の文を踏まえて、「試稿」における他力門の覚醒の構造を「相對無限」をキーワードに「絶對無限は自己の無限なる本性を棄てて相對無限となり、相對世界に入つて一切有限を無限に転化させる活動を行う」と論じる。また、満之が相對無限における他力回向の願行を「教」「行（縁）」「信（因）」「証（果）」において了解する点は、親鸞思想を的確に継承しているという。さらに、満之が三種莊嚴の浄土の伴属莊嚴の成就に無限協同体（安富説）としての浄土の徳性を見出しており、それは絶對無限の他力を信憑する宗教的信念に開かれる信仰協同体であるという。また、無限に帰依した有限は連続無窮に他の有限を無限へと覚醒せしめるはたらきをなすようになるとの了解から、藤田正勝訳の問題点を指摘する。

小結として、「試稿」は他力門の教学を西洋哲学の言語と概念を用いて究明し、独自の意味を再構築した基礎工事的著作であると述べ、曾我が述べる満之の思想史上の意義もこの点に確認でき得るという。『全集』刊行を転機に満之の思想に一貫性を読み取る研究が盛んだが、「試稿」

には『骸骨』にはみられない他力門への帰依という転換を明らかに窺え、満之が希求した「心の平安」を賦与する覚醒の構造が披瀝されるという。

問題点

思想研究の厳密さという点で問題と思われる事柄もあるので、気づいた点をいくつか指摘しておく。著者は、満之のミニマムポシブルを自力と了解し、満之自らが「俗諦勤儉の旨義」と踏まえる点を見落としている。「試稿」に満之の求道者としての姿をみるが、『骸骨』執筆時期のミニマムポシブルに真宗の徒としての満之の求道的関心はすでに明確である。また、「SKELETON」の語義解釈に現代の英和辞典（大修館）を用いるが、当時の『哲学字彙』等の訳語を踏まえた了解が必要ではないか。『骸骨』における「無限」の定義を宗教概念や哲学概念を包括する総称というが、満之が「宗教哲学骸骨自筆書入」で真如、神、仏等の各語の相違に留意すべきと注意する点に言及しない。また、『骸骨』第一章の内容を踏まえてその宗教観を了解するが、これのみで『骸骨』の宗教観を定義するのは不十分であり、満之が「宗教の要は主伴互具の関係を覺了せしむる」と語ること等を踏まえる必要がある。

満之が「試稿」で「宗教は安心立命の大楽を与える」と定義することを、著者は一貫して「心の平安」と了解するが、「試稿」でこの定義は「拔苦与楽」として論じられる。これは六道に生死する苦を抜き涅槃の大楽

を与えること（仏教の基本的課題）を意味しており、単なる「心の平安」とは課題を異にする。仏教は一切衆生の救済を、生死を離れること（出離生死）として説示する。満之は「試稿」で有限者の生を「生死流転する生、自害害彼する生」と了解し論を展開する。それは単なる「心の不安」個人的な心の問題ではない。また、満之が「保養雑記」に記す生死の問題の推究を著者は「現実の切実な問題、自身の精神的苦悩からの解放」というが、満之がこの思索を沢柳政太郎からの書簡を期に始め、応答もって終えることへの言及がない。書簡は大学時代の共通の友人日高真実の肺結核による死を伝え、憂苦する内容であったと考えられる。

満之の有限無限観における「主伴互具」にはほとんど言及がない。また、満之が「有機組織」の内容とする相依の関係を「主伴互具」の内容として了解する。これは「試稿」の浄土観にも通じる問題であり、丁寧な論述が必要である。さらに、質的無限を数的無限で語ることの限界について、満之自身が「試稿」では有限者が無限（法と覚者）を説くことの世界を「無明」と了解している。満之は「無明」を迷妄の根本として踏まえるが、このことへの言及が必要ではないか。著者は「試稿」において「有限の外に無限がある」という「根本撞着」が見出されるといふが、有限の外に無限ありという視座は他力門の根拠として『骸骨』に既に述べられている。思索の基本構想はすでに『骸骨』にあり、他力門の推究という課題の中で深められたと見るべきではないか。また、自他力二門の簡びについて、満之が「乞ふ二門を簡択すべき資料を説け」と言い、「実

際の修証」においては「機法の適合・不適合」「難易」の二点において了解することに、著者は言及しない。満之が他力門に帰す理由を明確に述べることに言及しないのはなぜか。満之は、自力門は衆生の機根を問題にする点で命数的であり、他力門は衆生の機根を問わず仏道の根拠は仏（無限）の側にあり、帰依は衆生の決断（随意的）によるとする。特に「命数的」という言葉は、「死生の問題」との関係で言えば当時の満之にとつて重く響く言葉ではなかったか。満之は「試稿」で、他力門を簡ぶ根拠を「宗教家は哲学の永久の探究に反して実際の修証を先とする」と言い、実際の修証を軸に論を進めていく。他力門への帰依を「試稿」の時期に見る本書において、不可欠の論点ではないか。これと関連して、満之は「試稿」で無限による救済の必然性と有限者における救済の必要性を明確に区別して論じ、後者に他力門を簡びとる根拠を見出すが、「必然性」と「必要性」について著者の論には混同が見られる。

著者は、満之が有限無限を表裏の関係で本来的に一致すると了解するという。構造論として了解しやすいが、実体化の危険性をはらむ。満之は、『骸骨』で靈魂開発を有機組織、主伴互具の關係の覚知であるとし、『安楽浄土』は無限の妙境界（有機組織、主伴互具の關係を説示する境界）であり、靈魂開発の極点であるという。また、「試稿」では三種莊嚴としての浄土を有機組織主伴互具において了解し、有限無限の關係を覚知しない者を「迷界に住する凡夫」、覚知する者を「悟界に住する聖人」と、「迷悟の範疇」で有限無限の關係を了解する。この迷悟の範疇における

満之の了解を踏まえた考察が必要ではないか。

著者は論の全体において、折々に「在床」からの展開を踏まえて考察するが、題名の「懺悔」についての論述がなされない。懺悔は回心懺悔という意味をもつ。「試稿」は、単に覚醒の構造を究明するものではなく、回心懺悔に基づく思索である。満之にも「学理は信念に根拠す」という視座があるように、真宗学は聞思の学、思惟に先立って聞名がある。満之の宗教的回心をこの時期に見ようとする本書において言及すべき点ではなかったか。さらには、『親鸞と清沢満之』と題する本書において、満之が親鸞聖人の宗教的自覚の極致を窺えたとした『歎異抄』への言及が皆無である点は、筆者には理解しがたい点であった。

満之以前と以後の真宗の学を対立的に論じることのもつ問題が指摘されてすでに久しい。この問題は昨今再び問題にされつつあり、筆者も関心を寄せてきた問題である。しかしそれは、単に対立を超えた、あるいは対立させない視座をもてばよいということではないだろう。「親鸞と清沢満之」という限り、そこには真宗学の徒としての満之が必然的なテーマとなろう。自らの生の畢竟依を問う思想言語としての「真宗（真実のよりどころ）」を「処世の完全なる立脚地」と語り明らかにした満之に肉迫し、親鸞と満之に学ぶことの意義は、教法を聞思し自らの畢竟依を頭かにしていく営みに収斂される。この真宗学の課題を共有し、筆者も著者とともに研鑽を深めていけたらと念ずる次第である。

【書評3】

「近代仏教」研究の見地より

碧海 寿 広（龍谷大学アジア仏教文化研究センター）

「近代仏教」と「近代親鸞」

仏教研究で近代への注目が高まっている。近代とは、仏教がこれまでにない速度で「自由討究」されるフィールドだ。宗派内では、旧来の祖述的なスタイルの学問が見直され、近代的な文献学的手法や、西洋哲学の知見を取り入れた、新たな宗学が形成される。宗派外では、教養文化のなかで、既存の宗派の伝統とは本質的に無関係の、仏教の自由な解釈が次々と出現する。この「自由」に変容する仏教のダイナミズムの、問題や可能性を考える学問として、「近代仏教」研究がある。

近代仏教において、親鸞はとりわけ重要な僧侶であり、明治以降、宗

派の内外で親鸞の教えや思想を問う知識人が大量発生した。「近代親鸞」という領域を想定した議論が可能なほど、著しく多量な言説の集積がある。「近代親鸞」については、研究史的には、福島和人『近代日本の親鸞——その思想史』（法藏館、一九七三年）が先駆的であり、近年ますます研究が盛んである。近代において親鸞は、右翼からも左翼からも積極的に読まれ（中島岳志『親鸞と日本主義』新潮選書、二〇一七年、Melissa Anne-Marie Curley, *Pure Land, Real World: Modern Buddhism, Japanese Leftists, and the Utopian Imagination*, University of Hawaii Press, 2017）、¹ 振れ幅が広い。だが、その主軸は、『歎異抄』をおもな典拠としつつ、「私の親鸞」を考え、語る系譜だろう（福島栄

寿『思想史としての「精神主義」』法藏館、二〇〇三年)。そして、この「近代親鸞」の展開の起点として語られる場合が多いのが、清沢満之とその思想である。

『親鸞と清沢満之』の位置づけ

本書は、「清沢ただ一人が、仏教、特に浄土真宗の教学の基礎工事に専念することに一生を捧げた」(二四九頁)と述べるとおり、清沢を近代の仏教者として、唯一無二の存在としている。こうした発想は、清沢の没後の紆余曲折を経て、戦後に支配的になった発想である。一方、近年の「近代仏教」研究では、「清沢以前」や「清沢以外」の重要性にも注目が集まる(碧海寿広『近代仏教のなかの真宗——近角常観と求道者たち』法藏館、二〇一四年、森岡清美『真宗大谷派の革新運動——白川党・井上豊忠のライフヒストリー』吉川弘文館、二〇一六年、中西直樹『明治前期の大谷派教団』法藏館、二〇一八年)。こうした現状に照らすと、本書の視野はやや狭い。

とはいえ、本書が清沢研究として意義深い知見を提供しているのは、間違いない。とりわけ、ここ数年で大きく研究が進んでいる「中期清沢」の検証として、高く評価できるだろう(長谷川琢哉「哲学の限界と二種深信——「中期」清沢満之における宗教哲学の行方」『現代と親鸞』三七号、二〇一八年、脇崇晴「清沢満之の浄土教思想——「他力門哲学」

を基軸として」木星舎、二〇一七年)。なかでも、清沢が神経生理学や心理学をどう応用し、彼の「靈魂」「心靈」論を構成したかの分析は、非常に興味深い(第Ⅱ部第四章)。そこから、特に「中期」までの清沢の宗教(仏教)論が、最先端の科学に基づく人間学でもあった事実が鮮明になるのである。

他方、「近代親鸞」の領域では、本書はいかに位置づけられるか。親鸞論として、本書の論述はやや特異な方法に依拠する。実証的な歴史・思想研究とも、主観的な解釈学とも微妙に異なると言える。議論を組み立てる際、親鸞と清沢の言説が繰り返り返し連結させられるのに加え、曽我量深や今村仁司らの言説にもたびたび接続する。清沢から曽我へ、そこから今度は蓮如へといった、時空を超えた解釈の連鎖も見られる(二二三頁)。それはまるで、親鸞思想をめぐる壮大な連想ゲームのようだ。本書の序で本多弘之氏は、これを親鸞の『教行信証』に通じる手法と指摘する(ii頁)。評者にはこの指摘の妥当性は判断しかねるが、たとえば四方田犬彦が提示した『教行信証』のテキスト批評を読むと(『親鸞への接近』工作舎、二〇一八年)、確かに本書と『教行信証』のスタイルには通じる部分があると感ずる。もし本書の論述方法が『教行信証』のアップデートだとするならば、これは非常に刺激的な試みであろう。

一方、著者は先人の見解に対し「知的理解に陥ることなく、自らの問題として」向き合う立場を表明している(二〇九頁)。こうした親鸞を語る人間の主体性の強調は、まさに「近代親鸞」の語りにも典型的な

のだ。だが、対象に向き合う際の「自らの問題」の過度の強調は、知の公共性や普遍性の脱落へと人を導きかねない。そして、「自己」という有限存在への埋没や、「自らの問題」に共感してくれる少数者による、閉鎖的コミュニティの形成に陥りがちである。これは、現代の「宗学」教「学」に一般的に見られる難点でもある（智山勸学会編、元山公寿監修『日本仏教を問う—宗学のこれから』春秋社、二〇一八年）。

さらに、本書が理論的な前提とする、「〈内在的〉救済」宗教としての浄土真宗、ひいては親鸞・清沢の思想という理解（一九—二〇頁）にも、いささか疑問がある。「いまの自分が置かれている苦悩の現実を一步も離れずに救われていくあり方」を「〈内在的〉救済」、それに対して「いまの自分が置かれている苦悩の現実を超えて救われていくあり方」を「〈超越的〉救済」と、本書は定義する（一四頁）。前者の「〈内在的〉救済」は、他界について沈黙した清沢については、おそらく妥当と思われる。だが、親鸞については、ここで言われる「〈超越的〉救済」の側面を、もつと注視すべきだろう。

昨今、「近代親鸞」に疑義を呈する中世仏教思想研究者が増えている。彼らは、親鸞を近代的な宗教観や認識論で狭く捉えすぎた「近代親鸞」を批判する。たとえば末木文美士は、晩年の親鸞の信仰の基盤を、俗世を超えた超越的世界に実在する神仏に見る（『親鸞——主上臣下、法に背く』ミネルヴァ書房、二〇一六年）。また小山聡子は、高僧の臨終時の奇瑞に浄土信仰の確かさを認める親鸞を描く（『浄土真宗とは何

か——親鸞の教えとその系譜』中公新書、二〇一七年）。こうした親鸞像の流通する現状において、著者の親鸞論は、近代的認識に傾きすぎた印象が否めないのだ。

「近代親鸞」の彼方へ

名和達宣氏が的確に指摘したとおり、「近代親鸞」は、『歎異抄』をおもな典拠に、「絶対他力」と「自然法爾」に理解が集約されがちである（「親鸞思想に内在する危険性」をめぐって——中島岳志『親鸞と日本主義』より喚起された問い』『教化研究』一六二号、二〇一八年）。本書にも、そうした性格は少なからず見られる（五八—五九頁）。こうした親鸞理解が、近代社会／思想にきわめて適合的な親鸞理解であるのは明らかだ。つまり、自己確立と自助努力が求められる近代社会への、思想的カウンターあるいはオルタナティブな主体形成の知として、「近代親鸞」は機能してきた。

だが、今日の思想状況で、こうした「近代親鸞」の思想が、ただだけのプレゼンスを獲得しうるだろうか。たとえば、現代では瞑想の技法と知が自己の問題に効くとして、高い評価や支持を得ている。支持を集める理由は、瞑想をめぐる言説が、科学の進展と並走しているからである。それに対し、「近代親鸞」は相変わらず、「絶対他力」と「自然法爾」を中核とした思想言説に終始しており、もはや撤退戦の様相を示している

というのが、評者の率直な印象だ。既存の「近代親鸞」を乗り越えた新たな親鸞思想や信仰は、何かありえないのか。これは、本書を通読して抱いた、未来志向の疑問である。

【リプライ】

三氏の書評を受けて

伊 東 恵 深 (同朋大学、著者)

はじめに

二〇一八年一月、拙著『親鸞と清沢満之——真宗教学における覚醒の考究』（春秋社）を出版させていただいた。真宗学を専門とする筆者の関心は、親鸞思想における宗教的覚醒とは何か、それはどういう内実や転換をわれわれに与えるか、という点にある。本書は、筆者がこれまでに執筆・発表した諸論文の中から、特に「真宗教学における覚醒」について考究した論稿を選び、論旨や体裁を整え、一冊の書物としてまとめたものである。

と同時に、本書の題名と構成には、これまで多くの先学によって論じ

られてきた親鸞と清沢満之の関係を、いま一度、討究したいという願いも込められている。というのも、名和達宣氏が「開催にあたって」でも述べているように、清沢の思想を親鸞と切り離して読解しようとする、特に近年の清沢研究に対して、真宗学を学ぶ者として何らかの反駁を行いたいと思っていたからである。

その試みがどれほどの説得力を持ち得たか、先達の研究成果を上回るものは乏しく、はなはだ忸怩たる思いしかない。しかし、昨年一〇月に拙著の合評会を開催していただき、本明義樹氏、西本祐攝氏、碧海寿広氏、三名の方から丁寧な講評を頂戴した。また当日の応答を受けた書評を執筆してくださった。三氏におかれては、何かとご多用の身にも関わ

らず、的確かつ重要なご教示を賜ったこと、篤く御礼申し上げる次第である。

以下、大変不十分ではあるが、三氏の書評に対して、それぞれ感じた事柄を記すことによって私の受け止めとしたい。

本明義樹氏の書評を受けて

本明氏の専門は真宗学であり、現在の所属からも分かるように、『教行信証』坂東本をはじめとする親鸞の聖教を厳密に読解することに、特に力点を置いて研究を重ねている。本明氏には拙著「第一部 親鸞論」を中心に書評を頂戴した。

さて氏は、特に坂東本『教行信証』に見られる親鸞の学的姿勢について、「文献学的な厳密性」と「聞思の学としての純粹性」を共に兼ね備え、両者を妥協することなく徹底している点にあるという。そしてこの二点から拙著を通観した場合、前者においては文献学的・書誌学的検証が不十分である点を、後者においては曾我量深をはじめとする近代教学を「自明の理」として前提的に語る問題点を、端的に指摘してくださっている。どちらも正鵠を射た指摘である。「文献学的な厳密性」を欠けば、親鸞の教えを恣意的に了解する危険性が生じる。また、「聞思の学としての純粹性」を失えば、ただの教条主義・原理主義に墮してしまふ。

金子大栄は「親鸞聖人の著述を研究するのは真宗学でなくして、親鸞

〔合評会報告〕伊東恵深「親鸞と清沢満之」を読む

聖人の学び方を学ぶのが真宗学である」（『真宗学序説』）と論じる。私たちは親鸞の学び方、すなわち「文献学的な厳密性」と「聞思の学としての純粹性」という、ある種、緊張関係の間に身を置きながらも、両者を妥協することなく徹底していかれた親鸞の学的態度に、自らの学びの姿勢を常に反省せしめられなければならない。真宗学徒である以上、決して忘れてはならない基底を、本明氏の書評に改めて教えていただくのである。

西本祐攝氏の書評を受けて

西本氏には拙著「第二部 清沢満之論」全体の書評を頂戴した。氏の専門は真宗学であるが、特に清沢満之の思想全般について、その思想的背景を精緻に踏まえた研究を行っている。筆者は平素から、西本氏の清沢研究に大いに示唆を受けているものである。

さて氏の書評は、「第二部」の内容を各章ごと簡潔にまとめた上で、「研究上の問題点」を詳細に指摘してくださっている。いずれの指摘も、筆者の資料の読み込みの甘さ、学的検討の不十分さを提示しており、拙著における「試稿」研究の不足点を明確に追究している。

一見すると、指摘された問題点は多岐にわたるように思われるが、すべての指摘は一点に収斂されるのではないだろうか。それは一言でいえば、「試稿」という思索的営為を、清沢の生涯における思想展開の中で

どのように位置づけるかという点が、私自身の中でいまだ十分に明解ではないということにあると思う。『骸骨』から「試稿」への展開は、清沢における宗教的課題や立脚地の変遷なのか、それとも深化なのか。西本氏は「『骸骨』執筆時期のミニマムポシブルに真宗の徒としての満之の求道的関心はすでに明確である」と論じる。

西本氏が挙げた諸問題について、一つひとつ応答する紙幅はないが、たとえば拙著において「懺悔」の考察や『歎異抄』への言及がないのも、ひとえに清沢の一生涯において「試稿」とはいかなる営みであったかという考究が不十分であることを露呈していると思う。それはひいては、清沢を一人の求道者としてどのように了解するか、という私自身の清沢観が厳格に問われているのである。向後の大切な課題としたい。

碧海寿広氏の書評を受けて

碧海氏は近代の仏教思想研究を特に専門とする気鋭の研究者である。私自身はこれまで、清沢を近代仏教（史）全体の座標軸の中で位置づけるという視点を、あまり有してこなかったので、今回、碧海氏の「近代仏教」研究の見地からの書評に多くの教示を受けた。拙著の視野は、現在の「近代仏教」研究の状況に照らすと狭いという指摘は、私自身の今後の清沢研究そして「近代親鸞」研究に、新たな方向性を与えるものである。

また、拙著の論述方法について、「実証的な歴史・思想研究とも、主観的な解釈学とも微妙に異なり」、「時空を超えた解釈の連鎖も見られ」、「それはまるで、親鸞思想をめぐる壮大な連想ゲームのよう」であるという指摘は、親鸞思想を自らの言葉によって、いかにして主体的に、かつ論理の飛躍を生じることなく客観的に表現するかという肝要な課題を提示している。これは、自己の問題の過度な強調は「知の公共性や普遍性の脱落」や「閉鎖的コミュニティの形成に陥りがち」になるとの指摘と、根を同一にする課題でもあると思う。

ただし、末木文美士や小山聡子が主張する、「超越性」を重視する親鸞理解や親鸞像については、真宗学を専門に研究する者によって、より正確で厳密な検討が必要ではないだろうか。これは本明氏が指摘した二つの視点とも通じる問題であろう。

碧海氏は、「今日思想状況で、「絶対他力」と「自然法爾」を思想の中核とする「近代親鸞」は撤退戦の様相を示しており、新たな親鸞思想や信仰が生み出される必要があるのではないか」（取意）と述べる。はたして「絶対他力」と「自然法爾」のみが親鸞思想の核心であるかどうかという論証は必要であるが、既存の「近代親鸞」を乗り越えた現代の親鸞思想を再構築するという課題は非常に重要であり、引き続き探求していきたい。

おわりに

本稿は、三氏の書評を受けての応答というよりは、書評を通して新たに、あるいは改めて気づかせていただいた視座について述べたに過ぎない。しかし、このような機会を設けていただき、それぞれの専門分野から多角的に批評を頂戴したことは、今の私に欠落している視点や今後の課題を明確に示してくださった。私自身、これからも「親鸞と現代」（「赤表紙と新聞」という課題を大切に、親鸞や清沢満之の思想とその現代的意義について、有縁の方々と共に確かめ、より深めていきたいと願っている。

末筆になったが、今回の合評会の開催ならびに本紀要収載の労をお取りくださった、名和達宣氏、市野智行氏、また主催・共催・後援くださった各機関、そして合評会当日にご参加くださった方々に、この場を借りて御礼申し上げる次第である。今後も、個々人の研究方法や各機関の役割を尊重しつつも、互いの立場や垣根を超え、親鸞と清沢満之をめぐる研究について、対話の場を開き続け、活発で自由な討究が行われることを念じて、今般の企画に感謝申し上げますものである。

【総括】

「親鸞と清沢満之」という命題、あるいは「近代教学」という課題

名 和 達 宣（真宗大谷派教学研究所）

本合評会は、伊東恵深著『親鸞と清沢満之——真宗教学における覚醒の考究』の刊行を機に開催されたものであるが、そこにおいて目標とされたのは、一冊の書に対する批評に終始することなく、立場や専門分野、研究方法の異なる者が、「親鸞と清沢満之」というテーマを自明視せず「命題」として受けとめ直すことであった。換言すれば「親鸞と清沢満之」がいかにして成り立ち得るか——あるいは成り立ち得ないのか——を、一人ひとりの身上において課題化することが眼目であり、その「と」こそが「対話」の場所となるのではないかと考えたのである。

開催に至るまでの経緯を、簡単に回顧したい。もともと筆者の前所属・親鸞仏教センターの先学である伊東氏が初の単著を刊行されたことを受け、その考究内容や研究史的意義をめぐって討議する場が必要であると

思い立った。その発案を伊東氏に伝えたところ、概ね賛同いただき、「すべてお任せします」との一言をいただいた。そこで、著者の現所属先である同朋大学に、文学部仏教学科専任講師の市野智行氏を介して相談をし、同学の仏教文化研究所（安藤弥所長）に主催を引き受けていただくこととなった。また、本書の意義を、真宗学のみならず、近年隆盛している近代仏教史研究のフィールドにおいても共有・議論することを企図し、筆者も参画している日本近代仏教史研究会吉田久一基金研究プロジェクト「仏教思想を中心とした日本近代思想史の再考」（代表 山本伸裕）が共催する運びとなった。そして、著者がこれまで所属し、研鑽を重ねてきた大谷大学（真宗総合研究所）、親鸞仏教センターには後援をご快諾いただき、結果的に真宗大谷派の主要な学事・研究機関（およ

び所属する研究者)が総合的に関わる大事業となった。

議論の切り口となる書評に関しては、市野氏と筆者との間で連携を取りつつ、著者と比較的同世代の実力者方に依頼をした。それぞれ専門的な見地に基づく鋭い批評は、本報告収録【書評1〜3】の通りであるが、企画側としては、これ以上ない最高の布陣であったと自負している。

さて、当日のコーディネーターを務めさせていただいた筆者の眼から見て、三者から提起された問いかけのなかで特に重要と思われたのは、第一に本明氏・碧海氏の書評で共に挙げられた「『教行信証』の手法」という視点である。これはひとえにその文言が提示された、親鸞仏教セクターの本多弘之所長による序文のインパクトを物語るものではあるが、本書の考究方法、ひいては「真宗学の方法」を問い返すことにもつながり、合評会を終えてもなお、余韻の残る問いかけであった。筆者自身の見解を述べれば、「時空を超えた解釈の連鎖」「壮大な連想ゲーム」とは碧海氏一流の謂いであるが、ある命題をめぐって想起された經典の言葉と自らに先立つ伝統的解釈(伝承)を綴ることは、まさに「『教行信証』の手法」にあたるのではないかと受けとめる。ただし、それが本書の方法と直ちに等号で結べるか否かや、現代のアカデミズムになじむものであるか(なじまないのであればどうすべきか)は、議論の余地があるだろう。

また、本明氏が「この問いは、「近代教学」を「足場」にしている私自身に向けられた問いでもあった」と吐露しつつ提起した、「近代教学

〔合評会報告〕伊東恵深「親鸞と清沢満之」を読む

における「曾我量深」の位置」という論点は、近年、小谷信千代氏より提起され、大きな波紋を広げている「近代教学」批判(誤解された親鸞の往生論)等)にも通じる問題である。これについては、二〇二二年に曾我の没後五〇年(前年に五〇回忌)を迎えるにあたり、機会を改めて考究すべき重大な問題ではないかと考える。清沢に照らしてみると、没後五〇年および没後一〇〇年を機に全集の編纂とあわせて基礎研究が蓄積されていたことが土台となり、いまや清沢は「先行研究の一人」というよりも、近代に親鸞思想を体現した思想家/求道者として扱われることが大勢である。曾我の場合は、清沢以上に聖教(『教行信証』等)の講釈が残されているため、大谷派の教学研究では、今もなお先行研究として扱われることが少なくないが、「近代教学」における位置のみならず、近代日本の思想史における意義を確かめるためには、まずもって地盤となる基礎研究の必要性を強く感じる。

そして、西本氏が第Ⅱ部の清沢論の主に「他力門哲学骸骨試稿」(以下「試稿」)の読解に対して問題提起をした種々の論点については、碧海氏の書評で挙げられていたように、近年「中期」と呼ばれる清沢の思想の研究が進んでいる動向に照らしてみると、いずれも各別に議論すべき重要なものであったと感じる。それらの点について、著者は「試稿」という思索的営為を、清沢の生涯における思想展開の中でどのように位置づけるか」と集約して真摯に受けとめているが、まさに清沢の生涯を貫く思想を確かめるうえで継続的に考究すべき課題と言えよう。「試稿」

の読解に関しては、没後一〇〇年を機に今村仁司氏や藤田正勝氏の先駆的な研究が出され、また近年では脇崇晴氏による新たな角度からの考察が試みられている。しかし「試稿」が『教行信証』の考察をした『在床懺悔録』に続く書であると捉えるならば、——「親鸞と清沢満之」という命題を追究するという意味においても——その研究は、真宗学に立脚する研究者がますます展開させていくべきではないかと考える。伊東氏の書は、間違いなくその礎となる成果であり、後学がすべからず尋ねるべき必読書である。

なお、このたびの合評会は、研究者にかぎらず本書のテーマに関心のある全ての人々に呼びかけた公開の場としたこともあり、討議の際、ある参加者から「緊張感がない」との厳しい指摘があった。それは研究史的意義を確かめることを中心とした合評会の趣旨と、真宗を学ぼうという求道的関心との間の齟齬によるものであったと考えられる。筆者自身は、当日の議論に緊張感がなかったとは微塵も思わないが、その一方で、各人の足下を確かめ直す重要な「一喝」であったと受けとめる。また、終了後も懇親会等の席上で激論は続き、発案時からひそかな目標であった、一冊の書を機縁としたシンポジオン (symposium) になったと確信する。

末筆ながら、著者の伊東氏をはじめ、書評を担当いただいた皆様、主催・共催・後援を担ってくださった各機関、そして共に企画を構築し、当日の運営を支えてくださった市野氏に、甚深の感謝を申し上げます。



合評会の様子